

✿ 高松塚古墳 墳丘断面の展示

飛鳥資料館の新たな常設展示として、高松塚古墳の墳丘断面を公開しました。実際の土層の表面に布を接着して、薄く剥ぎ取って標本としたものです。

高松塚古墳の壁画を生物被害等から守るため、2006～07年に石室解体事業が実施されました。墳丘中心部を発掘調査しながら掘り下げて石室を露出させる作業は、奈良文化財研究所が中心となっておこないました。その過程では図面や写真等の記録とともに、このような実物資料も保存したのです。

高松塚古墳は上段直径17.7m、下段直径23mを測る二段築成の円墳です。墳丘は、石室を構築しながら土まんじゅう状に盛り上げる下位版築と、遺骸を納めて石室を閉塞した後にさらに盛り上げる上位版築の大きく二段階にわけて構築しています。版築とは土をつき固めて3～5cm程の層を積み重ねていく土木工法で、密度の高い丈夫な盛土をつくることができます。

ここに展示したのは、下位版築の東西断面から得た標本です。版築は90層程あり、粘土質の赤い層と砂質の淡色の層を交互に積み重ねていること、特に強度が高い最下部の版築は土の色も異なること、凝灰岩の粉末が混じっていること等がわかります。また、大地震で墳丘に生じた亀裂が版築層を貫いて縦方向のシワのようにみえています。

今回展示した墳丘断面は、終末期古墳の精緻な版築の例として学術的にも貴重です。また、高松塚古墳の石室周辺の版築層は解体にともないすべて掘削せざるをえなかったもので、限られたものながら、高松塚古墳中心部の墳丘構造そのものを後世に伝える希少な資料でもあります。（飛鳥資料館 石橋 茂登）



展示の様子。土層は実物、中心の石室は模造。